

2011年度教養文化研究所第3回公開講演会報告

教養文化研究所長 竹中彌生

第3回公開講演会は12月14日(水) 13:20-14:50 角谷敏夫氏を講師にむかえ、第二講義棟7405教室で、『刑務所の中の中学校 桐分校』～学びと感動が人を変える～というテーマで行なわれた。

角谷氏は昭和22年生まれ。昭和48年、大学卒業後から松本少年刑務所教育課に法務官として35年間勤務し、桐分校に携わり、そのうち33年間桐分校担任を勤めた後、平成22年に退官された。現在は相田みつを美術館、信濃教育会青年教師フォーラム、各地の小中学校校長、教頭、教職員の研修会、PTA、中学生、高校生、大学生、人権教育研修会等、全国各地で講演を行っている。

角谷氏は『法務教官の仕事がわかる本』(平成12年・単行本・法学書院)、『刑務所の中の中学校』(しなのき書房・平成22年8月、NHK 週刊ブックレビューで紹介される。第24回地方出版文化功労奨励賞を受賞)『鉄窓の中の女教師』(桐分校を舞台にした日本テレビ木曜ゴールデンドラマの原案)(平成1年・2年、2作が放映)などの著書を始め、多数の論文を書かれ、また、ニッポン放送「菅原文太 ー日本人の底力」(平成19年11月)TBS テレビ「報道特集:塀の中の公立中学校」昭和63年、平成13年 SBC ラジオ「涙をこらえて悲しみに耐えるとき」平成3年(全日本民間放送連盟大賞) SBC テレビスペシャル「いのちの根を深くー刑務所の中学校ー」平成20年5月22日 TBS テレビドラマ特別企画「塀の中の中学校」企画協力。平成22年10月放映(第51回モンテカルロテレビ祭、最優秀作品賞・モナコ赤十字賞・最優秀男優賞を受賞)など、テレビ番組出演やメディアでの活躍を通じて著名な方であり、当日は大勢の聴衆を迎えることができた。

松本市立旭町中学校桐分校は刑務所の中にあり、様々な事情から義務教育を修了していない、全国から集まった受刑者が学ぶ日本で唯一の中学校で、世界にも類例がない。長年教官を勤めた角谷氏の同分校での体験、出会った生徒たちのこと、その学ぶ姿、そして卒業し出所した彼らの今の姿等についての講演は大変感動的で、会場の学生たちもそのような人々の話を聞くことにより、学ぶことの意味、喜び、楽しさ、そして学びと感動が人を変え、成長させることができることなどを考えることができ、彼らがどれほど恵まれているかを知ることができたのではないだろうか。大変重要な教育的効果があったと思われる。

竹中 教養文化研究所の竹中でございます。いつも大勢、教文研の講演会にご参加くださいまして、ありがとうございます。今日、また、ちょっと怪しげなお天気ですが、大勢お集まりくださいまして、ありがとうございます。今日は、角谷敏夫先生に来ていただいています。角谷敏夫先生は、NHKの番組などでもきっとご存じの方もいらっしゃると思いますでしょう。今日は「刑務所の中の中学校 桐分校～学びと感動が人を変える～」という題で、お話をいただきます。それでは、角谷先生をご紹介します。

角谷先生は、昭和48年に大学を卒業なさると、松本の少年刑務所教育課に法務教官としてお務めになり、35年間勤務なされ、この中学校の桐分校に携わられました。そのうち33年間、桐分校で担任をなさいました。平成20年に退官していらっしゃいます。ですから、まだついこの間まで松本の刑務所の中の中学校で教えていらっしゃったわけです。もう本当はご紹介するまでもないと思います。NHKでも一度ならず取り上げられていらっしゃいますから。私もその番組をたまたま拝見しまして、夜間中学の話は聞いておりましたけれども、こういうところに中学校があるのかと実は初めて知りました。その番組に大変感銘を受けたのを覚えておりますので、ほかにもそういう方、大勢この席にいらっしゃると思います。

有名な御著書『刑務所の中の中学校』で第24回地方出版文化功労奨励賞を受賞していらっしゃいます。そして、現在は、相田みつを美術館、信濃教育会青年教育フォーラム、各地の小中学校教職員の研修会、PTA、中・高校生、大学生、人権教育研修会など、全国各地で講演を行っていらっしゃいます。また、飯能の地域フォーラムでもご活躍中で、私どもが今日お願いしましたのも、その飯能の地域フォーラムで一緒の先生のご紹介です。実は、今日初めてではなくて、うちの大学では、もうすでに何回かお話しいただいておりますけれども、大変いいお話をしていただけるので、きっと皆様も感銘を受けてお帰りになられると思います。

それでは、角谷先生、お願いいたします。

角谷 鶯と、つつじと、そして教育の街、飯能市の皆様、こんにちは。

一同 こんにちは。

角谷敏夫です。よろしく申し上げます。わたしは、大学卒業した昭和48年から35年間、松本市立旭町中学校桐分校の教壇に立ちました。そのうち33年間、クラス担任をしてきました。この松本市立旭町中学校桐分校という学校は、松本少年刑務所の中にある日本

で唯一の刑務所の中の中学校です。世界にも類例はありません。さまざまな事情で、中学校・義務教育を修了できなかった受刑者がここで学んでいます。今日は、この松本市立旭町中学校桐分校、これから先は桐分校と呼びますけれども、この桐分校がどのような学校であるのか、ここで私が体験したこと、ここで出会った生徒たちのことと、その学ぶ姿、そして彼らが卒業し、出所した今現在の彼らの姿、そして、わたしの歩んできた道などを中心にお話ししたいと思います。その中で、学ぶことの意味、学ぶ喜び、学ぶ楽しさ、さらに、学びと感動が人を変えということと一緒に考えていきたいと思えます。

この桐分校が設立されたのは、昭和30年のことでした。以来、今年57回生が在学しています。昨年度の56回生で699名が卒業しました。皆さんの中学校の卒業数と比較しますと、この数は非常に少ないかもしれませんが、矯正教育、更正教育の世界では大変重要な意義のある役割を果たしました。

太平洋戦争が終わり、日本が平和国家を歩み始めていた昭和28年当時、松本少年刑務所には255名の青少年が収容されていました。その255名のうち、200名が義務教育未修了でした。78.4%に当たります。この200名の中学校未修了の子供たちを救済する方法はないかと問題提起をしたのが昭和28年のことでした。この78.4%の未修了者がいた背景は、戦争ないし敗戦による社会の混乱、社会の貧困、それから、彼らの修学環境が非常に劣悪であったこと、学制の転換期という背景があります。しかも、学力が非常に低かった。彼らをなんとか救済する方法を、松本市、それから長野県の教育委員会に相談をして折衝していく中で、松本少年刑務所の中に中学校をつくったらどうか、これが一番いい方法ではないか、そこで中学校教育を授け、社会生活に必要な資質を具備させる。これが彼らの更生のために最良の方法であろうという結論にいたりました。これを法務省と文部省に折衝しまして、なんとかつくることの可能性が見えてきました。

すぐ近くに、徒歩10分ほどのところに松本市立旭町中学校がありまして、そこに話を持っていきますと、校長先生も、教職員も、PTAも、非常に温かくこれを受け入れてくださいました。以来、57年間、受刑者である桐分校の子供たちを、わたしの学校の生徒である、わたしたちの市の中学校の卒業生であると受け入れてくださいました。この桐分校をつくるということも、それから57年間支えてきたということも、それは非常に深い人間愛と、それから教育の力への信頼、それから教育への情熱、これが桐分校をつくり、57年間育ててきた背景、エネルギーだったと思います。これは日本という国の形の良識の証ではないかなと、わたしは思っています。

今、振り返りますと、桐分校の1年というのは本当に学びと感動の1年だったな、そんな気持ちになります。桐分校の1年をこれから紹介していきたいと思いますが、私の彼らに対する基本的な視点は、「彼らは中学生であると同時に、受刑者である」という視点です。「あるときは中学生で、あるときは受刑者ではなくて、同時に双方を抱えている存在である。」そういう視点でないと、彼らに対するこの矯正教育は成り立たないと考えてきました。ですから、わたしは彼らに、自分の犯した犯罪に対する反省はもちろんのこと、自分の犯罪を深く自覚し、自己批判し、そして被害者、被害者の家族、被害者の周囲の人々の怒り、つらさ、悔しさ、悲しみ、といったものを常に考えながら中学校の勉強をするように、それが学ぶということだ、と常々言い続けてきました。こういった視点に立って、彼らに対する学校教育をすることが矯正教育であるというふうに考えてきました。

罪の償い方にはいろいろな方法があると思います。罰を受けることもその一つだと思いますし、私の考える罪の償い方というのは、平凡ですけれども、二度と犯罪をしない、再犯しない人間になるということだというふうに考えてきました。そうするには教育が必要である。教育にはその力がある。学ぶということは、先ほども言いましたように、再犯しない、二度と犯罪をしない。そういう人間になるということが学ぶことだ。このことは常々、彼らに言い聞かせてきました。

桐分校は男子だけです。わたしが出会った生徒たちは、18歳から67歳までのさまざまな年齢でした。毎年10月に全国の刑務所に来年度の生徒募集をします。12月に応募書類が届きます。応募書類に基づいて、内定をします。内定された子は、翌年の3月に松本に移送されてきます。4月1日からオリエンテーションを開きます。オリエンテーションではいろいろなことを行います。導入ですからまずやることは、彼らの心情を把握するために、個別にかなり面接をします。彼らの心配事や不安というものを少しでも取り除くために、随分個別の面接を行いました。それから、普段は学生服で授業を受けますので、学生服の試着をしたり、それから何か行事があるときにはワイシャツにネクタイをし、ブレザーを着ますのでそれらの衣装合わせをします。

衣装合わせということで思い出したのですが、昨年の秋、TBS テレビで「塀の中の中学校」というドラマがありました。ご覧になった方も多分おられると思いますが、わたしは企画協力ということで携わりました。このドラマの基になったのが、先ほど紹介していただきました拙著『刑務所の中の中学校』、この本です。このドラマの脚本がこれ

なのですけども、この脚本は内館牧子さんです。あの朝青龍の天敵です。このドラマを作るにあたりまして、2時間ほど内館牧子さんと話をしました。内館さんは3カ月で脚本を書き上げますということでした。そして、以前ご覧になった映画で、登場人物が男だけの映画があつて、それにすごく感動して、「今度のドラマを男だけが登場し、女性は登場しないドラマにします。」とおっしゃって、そのとおりにになりました。約束どおり3カ月ほどして脚本が届きました。その後、テレビ局に関係者全員が集まって、撮影開始打ち合わせ式というのがありました。出演する俳優全員と、それから脚本家、それからカメラマンも、とにかく少しでも関係する人全員が集まって、大体250名前後が集まって、ひとりずつ挨拶をし、その後、俳優さんたちがこの台本の読み合わせをしました。

さすがはプロだな、うまいなと思って聞いていました。この打ち合わせ会が終わってから衣装合わせに立ち会ってくださいということで、衣装室に行きました。そうしましたら、橋爪功、大滝秀治等、出演者それぞれが衣装を合わせて、これでどうか、あれはどうする等とやってみて、最後に渡辺謙さんが、主役が渡辺謙とオダギリジョーなのですが、渡辺謙さんがわたしの前に立って、彼は生徒役ですので、学生服を着てわたしの前に机をはさんで気をつけをしたのです。そのときにわたしは、35年間、毎年桐分校生に衣装合わせをしている感覚にとらわれて、錯覚して、いつもそのときに彼らにこう言ってきたのですが、「おお、よく似合う。その学生服を着て1年間勉強頑張るんだぞ。」というようなことを毎年言ってきたのですが、その感覚にとらわれて、「おお、渡辺、よく似合うな。それを着て1年間勉強頑張れよ」と口にしかけて気付き、「渡辺」と言ったところで気がついて、「渡辺さん、よくお似合いですね」。

余談が長くなりました。このドラマのことは、時間がありましたら、続きをお話したいと思います。

このオリエンテーション期間中に、一こま、1時間、「桐分校入学を希望した理由」という課題で作文を毎年書いてもらいました。1人の子のその作文を、原文のままお読みします。

原稿用紙を渡しますと、逆さに向けてる子がいます。原稿用紙を使うのは初めて。初めて見るので上と下が分からない。鉛筆を握る手は、がちがちに緊張しています。やたら字を聞いてきます。平仮名でいいから、平仮名で書いてくださいと言っても、漢字を聞いてくる。漢字で書きたいのです。35年間で一番多く聞かれた漢字は、「勉強」という字。2番目に多く聞かれたのは、「努力」という漢字。3番目に多く聞かれた漢字は、「一生懸命」という漢字。この三つの漢字を聞かれて、わたしは、勉強に対する彼らの心情がよく分かりました。

その作文。「私はじがよめようになりたい。どりよして、でまきをがんばりま。」漢字はわたしという字だけ。きちんと正確に書けていません。どう書きたかったかといいますと、「私は字が読めるようになりたい。努力して勉強を頑張ります。」と書きたかった。勉強はしたい、漢字の読み書きができるようになりたい、計算ができるようになりたいという思いが胸いっぱいなのですけれども、それを文字に書いて、わたしに伝えることができないもどかしさも、胸いっぱいなのです。

こんな作文もあります。「今まで自分が送ってきた生活を振り返ってみると、仕事に対しても、遊びに対しても、すべて中途半端。今になって考えてみると、自分の心のどっかにいつも中学校中退なんだ、ほかの人とどこか違うんだと、コンプレックスを持っていたような気がします」。こういった内容の作文が非常に多くありました。

オリエンテーション期間中に、入学認定会議というものがあります。いわば入学試験です。本校の校長、教頭、教務主任、それから桐分校主任、そして刑務所側からは所長、部長、それから課長、そして授業に携わるわたしたち教官、合わせて25名ほどでこの入学認定会議を構成しています。入学認定会議の主眼は学力がどれだけあるかではなくて、桐分校の1年の学習生活は非常にハードなので、それをやりぬく決意があるか、やり通す決心があるかを確認することです。それが主眼になります。卒業認定会議も同様にあります。この認定会議の議を経て、旭町中学校の校長先生が彼らの入学を認めます。入学が認められて、彼らはここで初めて出身施設の正門を出てから、ほっと一つの安堵を覚えます。でも、心のうちは、心配と不安でいっぱいです。まず、勉強についていけるかという心配。そして対人関係をうまくやっていけるかという不安。これでいっぱい、胸が。わたしの胸のうちも、今年のこのクラスは1年間どういうクラスになるのか。性格も違いますし、年齢も違いますし、学歴も違います。特に、性格は偏りが非常に強い。大きい。かなりコンプレックスを強く持っている子が多い。このクラスが1年間どんなふうになるのか、わたしの胸のうちも心配と不安。

このときわたしはいつも、「梅雨が明けるまで、梅雨が明けるまで。」とつぶやいていました。梅雨が明けるまでに、わたしとあの子たちが、生徒たち同士が、心のどっかにほんの少しでもいいからつながりができれば、それを基盤にして1学期を乗りこえ、2学期、そして卒業までたどりつける、たどりつきたい。そういう願いと祈りが、梅雨が明けるまでという言葉にこめられています。梅雨が明けるまでとつぶやいて、自分を奮い立たせてきました。

彼らは非常に気をつけて生活します、お互いに。どんな人間関係も大切にしてい

い、そう思っていました。特に、嫌な人、嫌いな人との対人関係は大事にするように言ってきました。6月下旬のころまでは本当に大変でした。対人関係が複雑にならないように、苦勞があり、難しいところもありました。

ですから、桐分校にも教育目標というのが六つありますが、そのほかにわたしは入学前に五つ、次の5項目の約束をします。この目標を実行するように約束させます。

その一つ目は、お互いに「さん」付けて呼び合いなさい。16歳の子も、67歳の子も、お互いに、「さん」付けて呼び合いましょう。

二つ目は、お互いに一歩下がって生活しましょう。

三つ目は、悪口や陰口は絶対言わない。

四つ目は、どんなささいなことでも、ありがとうと言う。

五つ目は、相手を褒められる人間になること、なりましょう。

この五つを実行するように、まず約束をします。一つ一つ説明しませんが、この五つの項目には非常に大事な、大切な意味を持たせています。例えば、さん付けて呼びなさいということは、それぞれの人間というのは、人格を持った尊厳のある存在なのです。その人格を尊重し合いましょうというような大事な意味が、5項目にそれぞれ込められています。

生まれてからこのかた、ほとんど人から愛されることがなかった。いつも居場所がない。いつもじゃま者扱い。両親にさえ見放され、小学校にも中学校にも通わせてもらえなかった。両親の名前も知らないという子もいました。両親の顔を知らないという子もいました。戸籍がない子もいました。こうした彼らが、今言いました五つの約束事を守ることは、非常に難しいところでもあります。わたし自身がこの五つを守ることも、実行することも、難しいことです。もちろん彼らは失敗します。そして失敗を繰り返す中で気づきます。わたしはその気づきを待つ。ただ黙って待つのではなくて、もちろん何かを投げかけます。投げかけて、彼らが気づくのを待ちます。失敗はやむを得ないことだと思います。大事なことは、失敗しないことよりも、失敗に気づいて、その失敗から学ぶことだと思います。

わたしたちは、ほとんどの人が挫折したり、挫折感を味わって生きているわけですが、大事なことはその挫折から、挫折感から立ち上がることです。立ち上がる力と英知を養うことのほうが、間違わないことよりもっと大事なことだと思います。私自身、挫折と後悔の連続でした。だからこそ、喜びや充実感も味わうことができるのだと思います。

それから、それに加えて、今の社会で大事なことを二つ申し上げたいと思います。今、政治の世界でも、経済の世界でも、社会でも、非常にたくさんの不正が横行しています。

今、わたしたちにとって大事なことは、一つは不正をしないこと。二つ目は、弱い者の心の痛みを理解すること。この二つを付け加えたいと思います。平たく言えばどうということかと言いますと、自分がされて嫌なことは人にするなということです。わたしはいじめられるのは嫌ですから、いじめはしません。わたしは差別をされるのが嫌ですから、差別はしない。ただ、この差別という問題は、わたしたちの意識下に、わたしたちの意識できないところにもあるもので、この差別の問題は非常に難しい問題であることは確かだと思います。

入学認定会議から1週間ほどして、入学式があります。桐分校の入学式は日本一の入学式ですと言って、彼らを入学式場に案内します。わたしは入学式の司会を務めながら、この桐分校の1年間で生きる力を養って行ってほしい。これから生きていく心の糧になるもの、心の支えになるものを、一つでいいから見つけてほしい、作ってほしい。そして、できるだけたくさんの感動を味わってほしい、1日に一つでいいから感動を味わってほしい、そのためには感動できる場面をたくさん作ろう。そう思いながら、入学式の司会をずっと続けてきました。

午前中に入学式が終わって、午後から早速授業が始まります。授業開始に当たって、私から彼ら一人ひとりに、教科書、ノート、筆記具、かばんなど教材の一切合財を渡します。教科書は大体このぐらいの高さになります。そのとき、わたしは必ず言うことがあります。「教科書の匂いをかいでください」。彼らは本当に一冊一冊教科書を開いて、鼻に持って行って、鼻を鳴らします。「それが教科書の匂いです。もしかすると、その教科書は1日も学校に通うことができなかった人が作った教科書かもしれません。文字が全く読めない人がインクにまみれて、その教科書を作ってくれたのかもしれません。でも、君らは今日から1年間、桐分校で勉強ができます。その教科書がぼろぼろになるまで勉強してほしい」。そう言って教科書を渡します。このときも彼らは、「入学式は初めてです」「こんなにたくさん教科書を手にするのは初めてです」と口にする子が随分います。

そして次に、わたしは彼らに入学祝いのプレゼントをします。「皆さんに入学祝いをプレゼントします。赤飯やケーキは施設の規則で、プレゼントできません。でも、それよりも味のあるものです、読めば読むほど味が出るものです、味わえば味わうほど意味が深くなるものです。」と言って

なみだをこらえてかなしみにたえるとき

ぐちをいわずにくるしみにたえるとき

いいわけをしないでだまって批判にたえるとき

いかりをおさえてじっと屈辱にたえるとき
あなたの眼のいろがふかくなり
いのちの根がふかくなる

という一編の詩を暗誦し、毎年彼らに入学祝いとしてプレゼントしてきました。

そして付け加えます。「この詩をわたしの授業の始まりのときには、毎時間順番で読んでもらってから、授業を始めます。この詩の意味は、今は説明しません。解説しません。1年間読み続けて、自分で意味を理解してください。」

わたしたちは、日本文学や世界文学でわたしたちを励ましてくれたり、いやしてくれたりする詩歌がたくさん持っていますが、それらの中でこの詩を、この詩は相田みつをさんの『にんげんだもの』の中の「いのちの根」という詩なんですけども、この詩を選んだ理由は、桐分校の1年間の生活に、彼らに一番ふさわしい詩であると思ったからです。そして卒業後も、社会の片すみのどこかで、この詩を口ずさむ日があるだろうと思いついて、この詩を選びました。そして二十数年間、毎時間毎時間、読み続けてきました。ですから、この詩をわたしはおおざっぱに計算しても、5,000回以上読んでいることになります。

桐分校で学習する科目は14科目あります。皆さんが中学校で学習した科目と同じものです。朝8時から夕方4時半まで、1日7時間の授業です。1時間の授業は60分です。休憩時間は、午前が10時を挟んで15分間、昼休みは昼ご飯の時間を含めて40分間、午後の休憩は3時をはさんで15分間。休憩時間はこれっきり。あとは授業をぶっ通しです。夜は一般の受刑者は9時で就寝になります。でも、桐分校の生徒の居室は、10時まで蛍光灯がついています。ほとんどの子は、体調が悪くない限り机に向かっている。そういう生活でした。夏休み、冬休み、ありません。勉強づけの1年です。兄弟もありません。家庭もありません。ないないづくし。あるのは、ひたむきな彼らの勉強だけです。ですから、わたしは彼らを「日本一勉強する中学生」と呼んできました。

ここで、彼らが桐分校で勉強したいと思った動機を、オリエンテーション期間中、毎年毎年アンケートをとってきたので、それを多い順番に紹介します。

一番多いのは、国語や数学が分からないと恥ずかしく、将来自分が困るから。これが40%で一番多かった。その背景、理由を説明したいのですが、社会生活、職業生活で彼らは非常に困った経験を持っているということです。市役所に行って何か救援の手続きを取りたくても、あきらめちゃう。1日仕事をして、報告書を書くにも書ききれない。

2番目に多いのは、勉強に励んで、人間として修養し成長したいから。

3番目に、将来、国家試験、資格試験を受験が、その受験の条件として中学校卒業の資格が必要だから。

国家試験や資格試験を受けて、少しでも優位な職業・職種に就きたい、社会生活を送りたいのだけれども、中学校卒業の資格を持っていないので、その試験を受ける資格さえないということなのです。今までの自分の人生の軌道修正をしたい。だから、資格試験、国家試験を受けていきたい。でも、その試験を受ける資格さえ、今は持っていない、だから桐分校でその卒業資格を取得したいというのです。

4番目は、せめて中学校だけは卒業しておきたいから。

ある年の卒業間際、67歳の子が、窓辺に立っていたわたしのところに近寄ってきて、心のうちをこう打ち明けてくれました。「先生、67歳になったおれが、なぜ桐分校で勉強したいと思ったかというね、死ぬまでに中学校を卒業して、人並みになって死んでいきたいんだ。だから来たんだ」。67年間、この思いをずうーっと持ち続けていたのです。彼は卒業後、毎年、正月と夏、わたしに手紙をくれるんです。年賀状、暑中見舞い。たまに、どこかに出かけたときに絵はがきをくれました。彼は死ぬまでに、と言っていました。もしかすると、昨日、彼は亡くなっているかもしれない。確かに、今年の正月と夏は彼からの手紙は届いていないのです。

今、見てきましたように、彼らは非常に勉強したがっていましたし、知りたがっていました、探していました。何をか。自分の今までの人生の軌道を修正する道を。それを探していた。ですから、彼らの教室での目は非常に真剣でした。彼らに生きていく道を教えてくれる人がいなかった。ですから、わたしはいつも彼らに、桐分校の学習を通して生きる力を養ってほしい、そう思いながら授業をし、彼らと向き合ってきました。

梅雨が明けて7月ごろから、彼らの学習、勉強は猛烈になってきます。九九ができるようになった、7の段がすらすら言えるようになったと大喜びをする。読めなかった漢字が読めるようになった。大喜びです。昨日の新聞に古墳の記事が載っていたが、あそこは昔おれが住んでいたところで、あの周りを歩いたことがある、というようなことが教室で話題になります。これは授業で古墳の勉強をしたから、そういうことに、新聞に載っている記事にも関心を持つようになっていく。勉強が少しずつですけれども分かるようになってきて、勉強の仕方が少しずつですけれども分かるようになってきた。自分の知識が、自分の心が、少しずつですけれども豊かになっていく。そういうものを実感して、彼らは感動する。感動している。日々。今まで知らなかった学問という新しい世界を知って、感動する。今、その学問をやっている自分に感動する。

1人の子が卒業感想文の一節に、こう書き残していきました。「一つ学べば一つ世界が

広くなる。二つ覚えれば二つ世界が広がる。こうして考えていくと、学ぶことは人として一生の仕事だと思えてくる。人間は生涯勉強が必要です」。こう書き残していきました。これを読んだとき私は、「うーん、深いことを書いているな。この子は桐分校の1年間で哲学者になったな」と、わたしはそのとき思いました。そしてそのあと、ふっと頭に浮かんだのが、中国の『礼記』という書物に書いてある「学びてしかる後 足らざるを知る」という言葉です。これは、わたし流に解釈すると、多分合ってると思うのですが、学問というものは奥が深いもので、学べば学ぶほどまだまだ学び足りない、もっともっと学びたい、そんなふうな意味だと思うのですけども、この言葉に先ほどの書き残していった文章は通じるな、そう思いました。

ある年、卒業間近に1人の子が言いました。「先生、おれ、こんなに勉強したよ。京都という字は読めた。京都で土木の仕事をしていたから。でも、場合によっては『京』という字も『都』という字も『みやこ』と読むね。おれはこれも読めるまで勉強したよ。」そして続けるのです。「実は、自分は、電車に乗って切符を買うときに、現場監督が、あしたは舞鶴が仕事の現場だから、あしたの朝8時に舞鶴に集合だよと言われる。朝、京都駅に行って切符を買うのですが、いくら切符を買ったらいいか、舞鶴という字が読めないから分からない。おおよその見当をつけて、少し多めの切符を買った。以前から、どこに行くにも。なぜかという、足りない金額で降りると、駅員さんに料金不足ですと言われる。そう言われると、自分が字が読めないことがばれてしまうような気がする。自分には見栄があるから、それは嫌で嫌でたまらない。だから、多めの切符を買えば、駅員さんは黙って通してくれる。」

皆さんでしたら、少な目の切符を買って向こうで精算するでしょう。この子の気持ちは分からないでしょう。字が読めない、計算ができないと、そういう思いになる。

「でも、おれはあしたから、そんな大損しないですむ。これだけ勉強したから。」と言いました。

彼の昨日までの生活は、そういう不利益を被っていました。でも、明日からは、そんな不利益を彼は被らないですむでしょう。

実は、彼は、腰痛、腰が痛くて苦しんでいました。7月のある朝、「先生、今の自分の気持ちがここに書いてあるので読んでください」と言って、わたしの授業のノートを持ってきました。そこにはこう書いてありました。「もう限界です。今、最後の力を出しています。元の施設に帰りたいのですが、先生、どうしたらいいか考えてください」。つまり、退学を申し出てきたわけです。わたしは1日彼のことを心配しました。どうしようか、どうやって説得しようか。気になっていたのも、体育の授業でソフトボールを

やっているグラウンドに行きました。そこで話をして、彼のその決心を、翻意させよう。ひるがえさせよう。どうやったらいいだろうか。

グラウンドに行くと、彼は仲間がやっているソフトボールを、グラウンドにべたっとすわって眺めていました。わたしは、とっさにしかりました。いや、しかったというより、どなりつけた。もちろん、彼とわたしの間には、そのときには多少なりとも信頼関係のようなものはできていました。彼は、びくっとして、グローブを取って守備につきました。でも、わたしはそのあと後悔しました。これは失敗だったと思いました。わたしは、帰りにそのノートに返事を書きました。「腰の痛みが確かに大変つらいことはよく分かります。しかし元の施設に帰っても、その痛みと別れることはできないと思います。どこにいても、その痛みとうまく付き合うしかありません。あるいは、できるだけ忘れるしかありません。3月の卒業まで大変だが頑張ってください。大変だからこそ頑張らしましょう。」と書いて返しました。翌朝、またノートが返ってきました。そこには、こう書いてありました。「先生、ありがとう。先生が言うことがもっともだと思います。わたしの考えが甘かったです。これから3月の卒業まで泣きません。先生、つまらない心配をかけました。本当にありがとうございます。頑張ります」。これを読んで、わたしはほっとしました。

が、ほっとしたのは、3日間。3日後から彼の行動がおかしくなってきました。彼に奇行がはじまりました。授業中、こうやって左の掌を見ている。ソフトボールをやっている、グローブをはずしてこうやって掌を見ている。ほうきで廊下掃除をしているといも、トイレに行って用を足しているときも、こうやって左の掌を見ている。これはわたしが彼の退学の希望を認めなかったで、そのストレスでこの奇行が、おかしい行動が出てしまったのかな、気になって気になって、2、3日後、彼が廊下掃除をしているときに、掌を見ているところを後ろからのぞきこんでみました。すると、人差し指、中指、薬指の3本の指の腹に漢字が1文字ずつ書いてあるのです。彼は、1日に漢字3文字の読み書きを覚えることを自分の課題と課し、くる日もくる日もこうやって。卒業まで続けました。その結果が卒業近くになって、「先生、おれ、こんなに勉強したよ。京都という字・・・」という彼になっていったのです。

刑務所には、絶対起こしてはならない三つの事故があります。刑務3大事故といっています。一つは火災、二つ目は、自殺。三つ目が、逃走。これを3大刑務事故といっています。絶対起こしてはならない事故です。

桐分校では10月と2月に遠足があります。遠足、もう楽しくて楽しくて、前の晩は眠

れない、わたしたちの遠足は。でも、桐分校の遠足は当日の朝、朝ご飯が終わったあと、わたしが教室に行って、「今日、遠足に行きます。」と初めて彼らに伝えます。事前に知らせることはできません。そして、当日の朝、わたしの作った「4月からの学習のまとめ、信州の教育、文化、歴史、自然を実地に学ぶ」というタイトルのガイドブックを渡し、初めて遠足の目的、そして行き先を説明します。なぜ、当日の朝初めて遠足を伝えるかは、先に申しました刑務3大事故の一つを思い出してください。・・・そういう理由。

いよいよ出発。教室を出るときに、わたしはこう言います。「今日、僕は手錠も捕縄も持っていかない」。手錠はよくテレビで出るからお分かりですね。捕縄というのは腰縄のことで、手錠とつながっています。「今日、僕は手錠も捕縄も持っていかない。僕の持っていく武器はただ一つ、それは4月から僕と君らで築き上げてきた、信頼関係です。この信頼だけが僕の持っていく武器です。だから、この信頼に応える遠足にしてほしい。そして、楽しい1日にしましょう。」と言って、バスに乗り込みます。この「信頼」という言葉が、彼らの胸深くに響くようです。

受刑者は、塀の外に出るときには必ず手錠と捕縄をします。そして、1人に対して2人以上の職員が厳重に戒護して行きます。でも、桐分校にはそれがありません。

1年間に彼らはたくさんのことを学び、たくさんのことに感動します。その中で一番彼らが感動するのは、2月の遠足での、本校の旭町中学校訪問のときです。正門に入って玄関に行くと、校長先生、教頭先生、教務主任、桐分校主任が迎えてくれます。校長室に案内していただき、旭町中学校の歴史などの校長先生の話が終わってから、家庭科実習室に行きますと、教職員とPTAの皆さんがおやきの下ごしらえをしてくださっています。初めてのおやき作りに桐分校生は1時間ほど悪戦苦闘し、できたおやきを蒸し器に入れて、音楽室に行くと、本校の3年生が待っていてくれます。音楽の交流授業がはじまります。

桐分校生は自分の子供、孫ぐらいの本校の生徒さんの合唱を聞いて心を震わせ、その瞳の美しさを、純真さを見て、驚いて感動するのです。そして、一緒に「ふるさと」と旭町中学校の「校歌」を一緒に歌って彼らは泣く。人目もはばからずポケットからハンカチを出して鼻と目をこするのです。わたしも毎年こらえきれずに、ついもらい泣きするのが常でした。

この2度目の遠足のガイドブックのタイトルは「わが母校 松本市立旭町中学校」というものです。この訪問で彼らは、ここが自分の母校だということを深く心に刻みます。この旭町中学校が彼らの今後の生きる大事な大事な糧になっていきます。支えになって

いきます。彼らにとって中学卒業ということと、旭町中学校は、後々の社会での生活での大事な大事な心の支えになっていきます。

わたしは卒業生と会うことはできません。禁じられています。ですから、クラス会も同窓会もできません。それでもわたしに会いたいといって訪ねてくる卒業生が何人もいました。手紙もたくさんきました。引き出しに入りきれません。今、それらはわたしの大切な宝物になっています。電話もたくさんきました。彼から電話がきたのは彼が卒業してから何年が過ぎていたでしょうか。刑務所というところは、電話は直接私の机の上の受話器にはこないのです。交換台を通して、それから各課につないでくれます。わたしの机の上の電話も交換台を通して、「先生、卒業生から電話です。」出てみます。彼いわく、「先生、今、出所しました。出所した刑務所の正門を出て、最初に目に入った公衆電話から今、電話しています。とにかく、出所したこと、一番最初に、先生に知らせたくて電話しました。」こういう電話でした。実は、彼、無期刑だったのです。成績が良かったので仮釈放になったのです。そのことを真っ先に知らせてくれた電話でした。

届く手紙には、いろいろな手紙がありますが、資格試験を受けたいから、就職試験を受けたいから、卒業証明書を送ってくださいという手紙。そのような手紙をもらうことは、大変うれしいことでした。

正門には必ず職員がいて、面会者などがあると内線電話で連絡してくれます。「角谷先生、バイクに乗った変なおじさんが面会に来ています」。僕は変なおじさんの知り合いもないけど。変なおじさん、誰だろう。正門に行くと、卒業生の父親でした。他県からバイクをとばして、「息子の卒業証明書をください」と訪ねてきたのでした。

先ほど紹介しました「一つ学べば一つ世界が広がる」と書き残していった子から手紙が届きました、15年ほど前でしょうか。その子は、小さなものですが、同人雑誌がいくつか集まったぐらいの小さなものですが、ある県で文学賞を受賞しました。彼の作品とその講評が掲載された新聞のコピーが同封されていました。そして、手紙の最後にはこう書いてありました。「いつも桐分校生だったことを誇りに思っています。わたしのアイデンティティーの原点は桐分校にあることは間違いありません。先生、いつか教育論、文学論などを語り合いたいと思います」。

小さなものですが、賞をもらった。ああ、この子は僕を乗り越えてというか、僕よりもはるか高みのほうに歩いていったな。彼は本当に桐分校で学ぶ意味を知ったのだな。もう僕なんかをはるか追い越しちゃったな。そう思っていました。でも、わたし

も今年の10月に、先ほど竹中先生から紹介していただきましたが、拙著「刑務所の中の中学校」が、第24回地方出版文化功労奨励賞を受賞しまして「僕も彼にやっと追いついたな。」そう思いました。

今年の正月7日に1通の手紙が届きました。その手紙は、こういう手紙です。「先生、3年がかりで約束を果たしましたので、お知らせします。3年がかりであのとき、卒業のときに約束した高校卒業程度認定試験に合格しました」。

先ほど、旭町中学校訪問の話をししましたが、大雪の2日後、まだ松本には雪が20センチもありました。その日、1人の卒業生が訪ねてきました。わたしが正門に行き、彼の前に立つと、彼は「在学中は大変お世話になりました。おかげさまでこうして無事に社会生活を送っています。わたしの妻です。在学中、先生に教えていただいたことを、『いのちの根』を始め、たくさんのことを覚えています。桐分校はわたしの心の原点になっています。桐分校に出会わなかったら、角谷先生に出会わなかったら、わたしは人生に気づけなかった。気づかず、今のような生活はできなかつたでしょう。いつかお礼に伺いたいと思っていましたが、今日になってしまいました」とあいさつしてくれました。角谷先生に出会わなかったらというのはお世辞でしょうけれども、そう挨拶をしてくれました。そして、「旭町中学校に連れて行ってください」というのです。2人を連れて旭町中学校に行きました。彼が、なぜ奥さんを連れてきたか、在学中は独身でした。想像ですけれども、彼は、自分の母校を奥さんに見せたかったのではないかというふうに、わたしは思っています。

本校に行くと、校長室には入ることができました。そして、校長先生においとまして、3人で正門を出ると、出るやいなや彼はきびすを返し「角谷先生、ここが僕の母校だ。この旭町中学校、僕の母校で、この母校が僕の支えになっているんです」。こうつぶやきました。彼にとって中学卒業というのはこういうことなのです。

卒業前日の最後の最後の授業のときに、わたしは毎年「いのちの根」を読み続けてきた感想を聞くことにしていました。

ある子の感想。「先生がこの詩を選んだのは、平仮名がほとんどだからおれたちにも読めるだろうと思ってこの詩を選んだなと最初は思っていたのですが、途中でそうではないということに気がつきました」。

ある子は、「初めのころは読んでいただけというものであったが、今はその1行が重く大切なものになっています」。

ある子は、「眼のいろがふかくなるということは、いのちの根がふかくなるということは、自分の心が変わる、自分の考え方が変わるということです」。

そして、ある子は、「字の読み書きが随分できるようになった。読み書きが一番大事です。読み書きができると、人生も変わります」。こう言いました。学ぶことによって人生が変わる。今までの自分の人生を修正することができるということです。

ある子は、「桐分校で学ぶことの喜びを知った。自分が知らなかったことを知る事が一番楽しい。知る楽しさに代えるものはない」と言いました。

この後者の2人の言った感想、これは学ぶことの究極の一つだと思います。最後の、学ぶことの喜びを知った。知る楽しさに代えるものはないと言った子は、先ほど紹介した高校卒業認定試験に合格した子です。

「桐分校に入学して、本当に良かったと思います。義務教育を修了していない、中学校を卒業していないということには幾度も泣き、幾度も悲しい気持ちになりました。でも、暗く長かった悲しみとも、苦しみとも、今日別れる日がきました」。これは、ある年の卒業式での代表の答辞の一節です。さて、いよいよ卒業式がきました。壇上で一人ひとりに校長先生が卒業証書を手渡します。この世で一番重い重い重荷の一つが、彼らの背負っていた義務教育、中学校未修了という重荷だと思います。その事実とそこから生まれる屈折したコンプレックスが、彼らの今までの人生を不幸で悲惨なものにしてきた一つの大きな要因だと思います。卒業式で、壇上で校長先生から卒業証書が手渡された瞬間、司会をやっているわたしには、彼の体からその重い重い重荷がすうーっと抜けていくのがよく見えました。そして、屈折したコンプレックスから、彼の心が解放されるのがはっきり感じられました。式の終わりに「仰げば尊し」を歌いますが、彼らは途中から歌えなくなってしまうのです。音楽の授業であれほど練習してきたのに、途中から泣き出して歌えなくなってしまうのです。式が終わって、控え室の教室に行くと彼らは号泣しています。抱き合って泣いています。

卒業式は彼らにとって感動以上のものなのです。10年、20年、30年、50年と、長い年月、中学校を卒業したいという願いを持ち続け、胸の内にそれを抱え続けてきた。その願いが、今かなえられた。それは彼らにとって感動以上のものなのです。

「勉強は大変だけれど、毎日新しいことが学べ、どんどん知識が広がり、桐分校に来て本当に良かった。桐分校を卒業した今、足元の道に明るい光が射してきました。桐分校は生涯の力です」。1人の子の卒業感想文の一節です。彼らの入学時の姿と、卒業時の姿を比較しますと、比べものにならないくらい知識も広がり、心も豊かになっています。

卒業後も、先ほど少し紹介しましたが、自分の道を歩んでいます。

こうした姿、彼らの教室で学ぶ姿、その後の姿を見ると、人間はだれもが学びたがっていますし、学ぶ人間の可能性を信じることができます。学ぶことが、感動が、人を変え、人を成長させるのだと思います。彼らは学び、感動し、自分を変えていったのだと思います。桐分校にはテレビやラジオや新聞が、よく取材に来ました。そのときに生徒も取材を受けることがあります。そのときに1人の子がテレビ取材のインタビューで「感動は裏切りません。」と答えた子がいました。

犯罪を犯した彼らを許す気はさらさらありません。いや、厳しく批判してきました。しかし、勉強したいという彼らの気持ち、桐分校で一心不乱に勉強している彼らの姿は、賞賛するに値すると思います。そして、卒業・出所後、社会で、その片すみですけれども、まっとうに生活して生きている。それは立派だなと思います。

わたしも子供のころ、たくさんの夢やあこがれ、希望を持っていました、皆さんと同様に。中学2年生のときに、自分は中学校の先生になりたいと思うようになりました。担任の先生の影響が大きかったと思います。ですから、中学の先生になることを目標に勉強してきました。大学4年。いよいよ生涯の仕事を選ぶ段階になりました。わたしの友人、周りの学生たちのほとんどは、小学校や中学校の先生になりたい、なろうという人たちでした。わたしもその中の1人でした。そのときに、わたしは自分に問いかけました。自分のやってきた学問は何のためなのか。

わたしは負けないことが一つだけあります。それは、貧しさだったらばだれにも負けないぐらいのところで育ちました。それを母と兄たちが応援してくれました。学校の先生や近所の人たちが応援してくれました。そうした中で、自分は学問をやってきた。その学問は何のためだったか。わたしの卒業論文は、わたしは歴史学を専攻しましたので「幕末期における民衆意識の一考察」というすごくかっこいい題名でした。中身は全然なかったのですけども。この学問は何のためだったのだろう。その問いかけは、「今、一番教育を必要としているのはだれなのか。」一番学ばなければならないのはだれなのか、一番学びたがっているのはだれなのか、という問いかけになっていきました。その問いかけは、若かったものですから、血気盛んだったものですから、それは非行に走ってしまった人、犯罪に陥ってしまった人たち。自分はそういう人たちの教育に携わろうと、若気の至りで考えたわけです。結論を出しました。

じゃあ、その方法はどうしたらいいのか分からなかった。知識がなかった。それで、法務省の人事課に、僕の大学は東京だったのですが、公衆電話から法務省の人事課に電

話して、どうしたらいいか聞きました。こうした私の事情、心情を説明しました。教えてくれました。試験を受けました。そして2月に内定通知が届きました。桐分校の内定通知。「仕事に就く前に一度松本に行って、どういうところかを確認しておいたほうがよいでしょう。」という手紙が添えられていました。内定通知をもらったので、昭和48年の2月、真夜中の23時55分新宿発の鈍行列車に乗って松本に向かいました。「あずさ」に乗るお金がなかったのです。宿泊する、浅間温泉に泊まるお金がなかったので、真夜中の鈍行列車に乗って。その鈍行列車は明朝8時ちょうどに松本に着くのです。

途中で諏訪湖というところがあります。空が白み始めて、諏訪湖に雪が舞っていました。2月ですから、一番寒い季節です。その諏訪湖に雪が舞っている風景を、窓から、車窓から眺めながら、自分はこれを、この仕事を自分の天職にしよう。その諏訪湖に雪が舞う風景を見ながら、決意し、決心しました。天職というのは、最初から自分に備わっているものではない、生まれたときから備わっているものではなく、自分で自分に築き上げていくものだ。そう思って、これを天職にしよう、そう決意しました。その日から、もう38年が流れました。

桐分校のグラウンドからは、北アルプスが眺められます。その北アルプスの一つに常念岳があります。2,875メートルだったと思います。3,000メートルにちょっと足りない。常念岳、「じょう」という字は、「常」という字。「ねん」は「念」じる。常念岳。その山をグラウンドで生徒と一緒によく眺めました。彼らは「先生、あの山に登りたいね」。毎年そう言いました。わたしは、「常念という名前はね、常に君らの更生を念じているから常念という名前がついているのだよ」と、わたしの作ったエピソードを説明をしました。常念岳には、別にエピソード、いわれがあります。常念坊というお坊さんの話なんです。わたしはそういう話をしました。ある年、生徒一人ひとりに小さな白い玉石にサインをさせて、それをリュックに詰め込んで、一人でその常念岳に登りました。山頂に小さなほこらがありまして、そこにその玉石を置いてきました。

毎年毎年、それぞれ重荷を背負った生徒と桐分校登山をしてきました。毎年、地図は違っていました。毎年、嵐の日、吹雪の日がありました。行く道を岩がふさいでいることもありました。このわたしという桐分校登山案内人は、非力で、リュックに詰めているものは粗末なものでしたから、果たして彼らに十分な人生の登山案内ができたかどうか。彼らが真の人生の登山家になれたのかどうか、わたしの胸の内は心配と祈りでいっぱいです。

刑務所の中の中学校である桐分校に入学しなければ、一生涯中学校の勉強をする機会がなかった彼らを思うと涙があふれます。と同時に、深い人間愛と教育の力への信頼と教育への情熱から桐分校をつくり、57年間育ててきた人たち。そして699名の卒業生が教室で真剣に学ぶ姿。それを思うと、やっぱり人間は素晴らしいなあ、と思います。教育とは希望を語ることです。学ぶとは生きる力を養うことです。桐分校には、学びと教育と人間の原点があったと、今、感じます。

これも中国の古典ですけども『書経』という書物に、「刑は刑無きを期す」とあります。刑罰というのは、犯罪がなくなることを期待して存在するという意味だと思っています。

桐分校を必要とする人が一人もいなくなる社会が1日も早くきてほしい、そう思います。桐分校はいろいろな事情から、義務教育中学校を修了できなかった受刑者の最後の最後の救済の場所です。桐分校は昭和・平成の寺子屋、そして桐分校は犯罪の道から更生の道へのかけはしです。

彼らが生きていくこれからの先には、厳しい社会の風が吹きすさぶと思います。それは今日も彼らには吹きすさんでいると思います。最後にこの699名の卒業生に「風に負けるな。そして、自分に負けるな」とメッセージを送りたいと思います。きっと届くに違いありません。

もうすぐ正月です。皆さん、子供たちが正月にたこあげをしている風景を思い描いてみてください。「たこたこあがれ、みんな良い子、悪い子なかりけり」これはわたしが高校時代、図書館か本屋さんにかかっていた吉川英治の色紙に書かれていた言葉です。

「たこたこあがれ、みんな良い子、悪い子なかりけり」飯能市の皆さん、ご自分のお子さん、隣近所の子供たち、地域の子供たち、町の村の子供たちに寄り添ってあげてください。それぞれの子供たちは、今、人生の中で大事な大事な季節、時を過ごしています。子供たちを皆さん全員で育ててください。全員で飯能市の子供育てをしてください。そして、子育てと同時に、自分育てをしてください。それが何よりも子育てにつながると思います。そして、飯能市育てにもつながっていくと思います。

わたしの性格には二つ問題点がありまして、一つは欲が深いこと。二つ目はすぐにあせることです。欲が深いものですから、あれも話したい、これも話したいと欲張ってきたので時間が来てしまい、それであせっています。つたないお話でした。今日、ここに立てましたことを大変うれしく思っています。そして、大変光栄に思います。つたない話でした。ありがとうございました。

竹中 角谷先生、本当にどうもありがとうございました。今、お話を伺いながら、何度も何度もジーンと心にきて、感動のあまり鳥肌が立って、そして、涙が何度も出そうになったのは、私だけではなかったと思います。本当に角谷先生、ありがとうございました。私は長いこと教職に携わっておりますけれども、今日は本当に教えていただくことがたくさんあるお話でした。

先生、まだ少しお時間いただけますか。大丈夫でしょうか？ 会場からご質問のある方もいらっしゃると思いますので、どなたかご質問、何か、ちょうどいい機会ですから、お聞きになりたい、学生さんでもいいです。お聞きになりたいことがある方がいらっしゃいましたら……。もう確かに時間になってしまっはいるのですが。はい。

○ ありがとうございます。入学のときの認定会議で、ここを通過するのは何割ぐらいですか。

角谷 ほとんど入学が認められます。100%と行ってよいです。本人が拒まない限りは、校長先生は認めてくださいました。

こういうことがありました。非常に記憶に残っていることです。「自分を入学させないでください」という子がいました。このお話しもしたかったのですけれども、この子は他の施設から来た子でして、最初からわたしに、「僕は勉強する気さらさらありません。無理に連れてこられたので、帰してください、帰してください」の一点張り。でも、入学認定会議に出席させれば、もうやむを得ないと思って入学するだろうと考え、認定会議に出席させました。その事情は校長先生にも話しておきました。でも、校長先生の質問いきなり、「校長先生、自分を入学させないでください。」こう言うのです。事情は校長先生もご存じだったのですが、最後に校長先生が入学認定をするときに、「彼を1年間指導していくにはかなりの問題が予想されますけれども、個別指導などをしてやっていきましょう。勉強してほしいと思いますので、入学を認めます」とおっしゃって入学を認めてくださいました。

実は、この子は中学校1年生のときには出席日数は半分でした。2年生になると4分の1。3年生のときに登校したのは数日間でした。つまり、当時の言葉で言うと、登校拒否をしていました。学齢期が過ぎても、仕事は2, 3カ月、3箇所ぐらいで、あとはなし。家に閉じこもって。それで、今回まで非行歴もなかった。今回初めて犯罪をした。そしてある施設に収容されて間もなく、彼は自殺未遂をしました。刑務所は24時間、収容者を観察しているので、発見されて自殺未遂ですみました。彼の自殺を図った理由は、受刑

によって家族から見放されるのではないかという不安と、ほかの受刑者からいじめられるのではないかという恐怖感から自殺をしました。桐分校に来た22歳の彼は、まだ登校拒否の延長線上にありました。本人が一番つらかったと思います。だからこそ、わたしは彼を入学させなければならぬ。そして、卒業させる自信のようなものをわたしは持っていました。わたしが救われたのは、彼はわたしの面接を拒否することがなかったことです。必ずわたしの面接を受けたことです。それがわたしにとっての救いでした。

やはり彼は入学しても規則違反をしました。3回規則違反をして退学処分を受けようとなりました。わたしは教育的配慮と称して処分しませんでした。7月ごろから彼は変わりはじめ、自分を表現するようになりました。わたしの渡す原稿用紙に短い詩や短い物語を書いて、自分を表現するようになりました。無事卒業しました。仮釈放で出所するときに、家族全員が迎えにきてくれました。そのときに彼はこう言いました。「何もしないで悩むよりも、何かをして、そのことで悩んだほうがいいということが、先生、分かりました」。

竹中 今、ベルが鳴りました。次の授業がスタートするまで、あと10分ありますけれども、大急ぎで次の授業に行く学生さんは、どうぞ行ってください。お話が本当に感動的で、きつともう質問しなくても十分いろいろ伝えていただけたのだと思います。学生の皆さんは、自分たちがいかに幸せかということを重々感じて一生懸命勉強してくださいね。それでは、先生、本当にありがとうございました。